

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494



非核の願い、第五福竜丸、そして奇縁

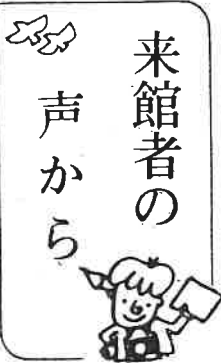
副島 種典

私は、大学を出た一九三七年から一九四五年八月の敗戦に至る八年五カ月のあいだに、三度にわたり延べ四年四カ月軍隊生活を送った。兵隊生活である。学習院高等科時代に満洲事変と五・一五事件のことで配属将校(中佐)と口論し、軍事教練が不合格となったからである。そして軍隊のなかでも不従順だったため、三年四カ月の長きにわたって上等兵のままだった。

爆心地を数時間歩いて帰隊したため第二次被爆のせいらしいと気がついたのは、よほど後のことである。戦後、一時期に与えられた自由がしだいに削減されてゆく情勢のなかで、私は一九五〇年二月から約二年、有名な総合雑誌の国際コラムに無署名の論説を書く機会を持った。私の分担は社会主義圏である。何を取り上げるかは執筆者に一任されていた。私は七月号には、三月にストックホルムで開かれた平和擁護世界大会常任委員会第三回総会をめぐる状況について書いた。最後の部分には、「われわれは……原子力兵器の禁止と、最初にこれを使用する政府を有罪とすることを提案する」と結んでいる。「ストックホルム・アピール」の全文を掲げておいた。その文章の表題は、「平和のためのたたかい」である。占領下での文筆によるさやかな抵抗である。分担範囲を逸脱して、独自の判断でストックホルム・アピールを取り上げたのは、やはり広島が体験がさせたことであろう。話は飛ぶ。十年あまり前から、私は

東友会の諸行事にご案内をいただき、会員の方々と交遊を深めているが、初めのところはいつも当協会の広田重道専務理事(当時)と同席し、いろいろ話を交すことができた。そして一九七七年秋からは、広田さんとは別の関係でも新しい間柄になった。同氏のご息女が私にとってきわめて近い存在になったのである。残念なことに、広田さんは反核の運動が世界的に新たな高まりを見せ始めるまえに他界されたが、広田さんのご縁続きの方が住職をしていられる横浜の善教寺での内輪の一周忌に、私もお招きを受けた。本多喜美理事も協会を代表して列席されていた。最後に、反核運動とも第五福竜丸とも関係のない奇縁を一つ。広田さんのご息女岩佐恵美さんは、まだ生協関係の仕事に集中していられたころに起きた「灯油裁判」に、当初からずつと関わっているが、そのたまたかの中心地・山形県鶴岡市は、私の親父、種臣と二重の縁のある土地で、「書家」副島蒼海の優れた作品が多くあるので有名である。今秋、二度目の訪問をするのを楽しみにしている。

(元愛知大学教授)



来館者の声から

大学生協東京地方連合会が六月に行なった「ピースナウイン東京」の感想文集が届いた。展示館を訪ねた二百人近い大学生がひとつひとつ記した感想を拾ってみると：

第五福竜丸の乗組員以外にも被害を受けた人々がいたということ



あじさいの花の残る展示館前広場でグループ討論を行う「ピースナウイン東京」参加者

を初めてはっきりと知った。ビキニ事件は遠い場所でのできごとで被害を受けたのはほんの少ない人だと思っていたんです。でもマグロの問題など、多くの人々の生活に直接影響していったのだということを知り、人間の生命を奪うことのおそろしさを感じました。(お茶の水大・女性)

指が六本ある赤ちゃんの写真を撮ることをちゅうちょした時、島の人々が、名前も顔も写してくれ、そして世界中に知らせてくれ、これを読んで涙が出そうになった。

七月二十日、協会第78回理事会が開かれ、賛助会員の拡大、資料室建設など討議しました。顧問・理事・評議員の人事についても審議し、新たに五名の顧問、三名の評議員を推薦しました。

夏休みとともに展示館は盛況。家族一緒の見学が増える中で、埼玉川越高校の小グループの来館がつづいています。先生が用意したたくさんの質問、学習の課題に答えるように、ノート片手に連日

本当に感動した。そしてこれが活動の原点だと思った。(日本獣医大・男性)

八五六隻もの船が死の灰をかぶった事実を知らなかったことは悔しいです。「今日の雨には××カウントの放射能が混じっています」なんていうニュースが日常生活の中で流れたらどんな気持ちになるだろう。(法政大・男性)

悲しい作り話でも何でもない事実がそのまま展示してありインパクトが強い、自分の目で見たとい

二十人近い高校生が熱心に館内を回っています。

千葉原船橋市のコープ生協のお母さんたちも各地区毎に来館、市民生協広島子ども代表団、都民生協広島派遣団のみなさんも第五福竜丸を見つめて、八月の広島に向いました。筑波研究学園都市からは研究者と新日本婦人の会支部が、また東京都職労の港湾関係者も多数来館。遠くソビエトから日ソ親善観光団(二百名)が訪れ、原水爆禁止世界大会に参加する海外代表も展示物に見入り感慨を新たに

うところが。知ったことは過去の事実、感じたことは未来にはくりかえさせないということです。(茨城大・女性)

日本国民一億が全て第二の第五福竜丸に乗っている……このことにショックを受けた。(群馬大・男性)

消されようとした福竜丸を救ったのはみんなの力だと実感した。平和はみんなの大きな力で考え行動していくものだとは船は教えている。(学芸大・女性)

しました。

「平和展」を福竜丸航海中各地で今年も数多く、平和のための戦争展、原爆展がひらかれ展示館からも写真パネル等を貸出しました。西宮市が主催した原爆展では第五福竜丸も主役。33年前久保山さんに激励の手紙を書いた市民も当時の思い出を語るなど反響が広がりました。豊島区役所でも第五福竜丸写真展がもたれました。埼玉・西宮・大阪と巡った写真パネルは、いま、品川・大田等東京の「平和展」を航海中です。

平和随想 (七)

三宅泰雄



第五福竜丸がビキニ海域で被災したのは、一九五四年三月一日のことでした。船は三月十四日に母港の焼津に帰りましたが、船員の人体はいうに及ばず、漁獲物のマグロまでが放射能で、著しく汚染されていることがわかりました。他の漁船が持ち帰ったマグロからも、つよい放射能が検出され、マグロ漁業界は未曽有の危機にさらされました。

農林省は、海洋漁業対策審議会を中心に対策を練りましたが、結局、ビキニ海域における放射能分布の実態の把握が先決であるとの結論に達しました。

調査責任者には、水産庁調査研究部長・藤永元作博士、調査船は下関農林省水産講習所の練習船・俊鶴丸がえらばれました。海洋の

放射能汚染は有史以来、はじめての経験であり、また当時は放射能に関する知識も技術も、まだ至って不十分な時代でした。

藤永博士は、各省庁と海洋学会、水産学会に援助を乞い、十三人の専門家からなる顧問団を組織しました。松山博士と私も、そのメンバーに加えられました。第一回の会議を四月十四日に開き、その後、数回の会議を経て、二十四日に調査計画の大綱がきまりました。調査団には、国立研と大学の少壮科学者二十二人(医師一人)が起用されました。団長には南海区水産研究所(高知市)の矢部博氏におねがいすることとなりました。また、報道機関からの要請で各社の記者、七名の同乗が許可されました。

藤永博士は東大農学部水産学科の出身で、一九四九年に新設の水産庁調査研究部長に就任しました。それまでも、クルマエビの生態研究者として、著名な水産学者でした。部長としての博士の任務は、戦後の調査・研究の立て直しと、全国各地に国立水産研究所をつくることでした。それまでは、東京に農林省水産試験場が一ヶ所ある

だけでした。博士の努力で新たに七つの国立水産研究所が発足しました。

博士が一生をかけた仕事は、全く未知であったクルマエビの生態の研究でした。博士の並々ならぬ苦心の結果が、ついにクルマエビの養殖を可能とし、世界の水産界に大きい恩恵をもたらしました。俊鶴丸調査計画の途中、博士はいくどかアメリカ大使館によびつけられ、計画を中止するよう威嚇されました。日ごろは至って温厚な人でしたが、博士はその威嚇には、いささかも屈することなく、予定通り計画を推進しました。

団長の矢部博氏は、藤永博士と東大の同期生で、また、奇しくも私の静岡中学(旧制)時代の同級生でもありました。中学を出てから、めったに逢う機会もありませんでしたが、私たちは久々の再会を喜びあいました。

少年時代の矢部君は大柄で、心やさしい少年でした。団長としても、寄り合い所帯で、しかも気むずかしい科学者と、個性的な記者たちを、円満に統率し、美事に難事業をなしとげました。一九五六年、アメリカは再び水



爆実験を強行(ツグミ作戦)、政府はこの時も、俊鶴丸をビキニ海域に派遣しました(団長・矢部氏)。この実験は、高空爆発であったため、海洋汚染は前回ほどではありませんでしたが、逆に大気汚染は、前回は甚しく、上まわっていました。アメリカは高空水爆実験で、ソ連に先をこされ、それに追いつこうとして、ツグミ作戦を強行したのでした。

藤永氏は国際会議に出席のため、アメリカに出張中で、顧問団の団長は藤岡由夫博士(原子力委員)、副団長は松山博士が担当しました。私もそのころ、環境放射能の講演のため、アメリカの各大学を歴訪していました。その途次、ワシントン市で思いもかけず、藤永さんにめぐりあったのも、いまは忘れ得ぬ思い出となりました。

博士は一九五九年に農林省を辞し、その後は専ら水産学の進歩のために貢献、一九七三年九月、七十才で亡くなりました。

第五福竜丸が練習船に改装されていた当時の学生だった私

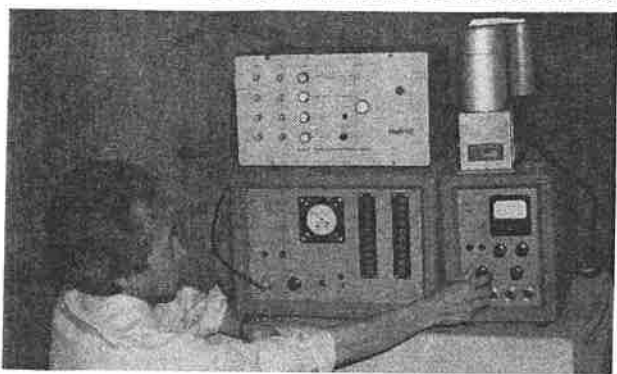
江川 公明

私が東京水産大学に入学した時(昭36年)、はやぶさ丸という練習船が大学の岸壁に係留されていました。

その白い練習船がもと第五福竜丸であることは、入学後すぐ上級生が教えてくれました。船体内部はすっかり改装してしまっただけで、残留放射能の心配は全くないという説明でした。当時の私は、元乗組員の方々の顔など浮んでも来ませんでした。

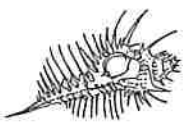
第五福竜丸あらためははやぶさ丸は、時折東京湾で学生の実習に使われていましたが、既に老朽船で、大方の時はただ静かに岸壁に浮んでいました。それからもう二十年以上が過ぎました。私の勤務先である神奈川県水産試験場で、倉庫の大掃除がありました。ガラクタクの山ができ、その中に薄汚れて壊れた電子計測器が

混じっていました。昔マグロの放射能を計った機械が廃棄されていたのです。この機械が第五福竜丸と直接関係はないにしても、同時代のものとして共に保存されればと思ひ、記念館に持ち込みました。この時はじめて記念館を訪れ、二十数年振りに第五福竜丸に再会しました。船内は新しく修理が施され、白木が匂っていました。自分が見えました。自分は平和を求める側に立っているのだと言いつつ普段何もしていない私に骸骨は迫って来るようです。平和協会から資料収集などへの協力を求められ、いくらか救われた思いもしたことでした。(神奈川県水産試験場職員)



ビキニ事件当時、三崎で使われた放射能測定器(江川公明氏寄贈)は船体の下に置かれた

汚れて壊れた電子計測器が



反核はがき、反核豆本(原爆詩歌集)、反核三色紙・短冊……

賛助会員で、原爆文献研究家の長岡弘芳氏が、手渡しのメッセージとして反核はがき、詩歌集、三色紙の普及を訴えています。原爆詩歌集はAフォークスより安くフライデーより軽いV一四九円と手頃ですが、胸迫まる作品が、多数収められています。また、反核三色紙・短冊は文字は楊子で書き、ストックの押花をつけた、長岡氏の全くの手作りです(カンパ十円以上)。「三冊でも五冊でも引受けていただければ……」と。ご協力を。

△連絡先 長岡弘芳 練馬区南大泉四の三の十二ノ(三三)三三六

